

R F S 研究会、経済産業省課長ら 4 氏が報告

R F S (リテール・ファイナンシャル・サービス) 研究会が OSIPP 棟で開かれ、3 月 14 日は「A Legal and Economic Analysis of Interest Rate Regulation ~ 米国での消費者金融にかかわる消費者保護と上限金利の歴史的背景についての考察 ~」のテーマで、G E コンシューマー・ファイナンス・ジャパンチーフ・リーガル・カウンセルのトーマス・クラーク (Thomas M. Clark) 氏が報告した。同氏は、低リスクで安定を図る銀行が貸し渋る中、高金利を設定する貸金業者による倒産、貸し倒れが横行している背景を日米のケースをもとに説明した。

4 月 25 日は、経済産業省取引信用課長桜井和人氏、同課長補佐渡辺重信氏が「産業構造審議会産業金融部会の中間報告『中堅中小企業のための新たな金融機能の創造に向けて』について」と題して報告した。

両氏は、高金利・高リスクである消費者金融と低金利・低リスクである銀行との間に『中金利・中リスク』である資金運用スキームを探り、規制

緩和等の政策アプローチを含めた今後の見通しなどについて指摘した。

続いて同日、上智大学法学部助教授、小塚莊一郎氏による「資産担保金融の制度的条件 - 可動物件担保に関するケーパタウン条約を素材として - 」の報告があり、同氏は可動物件担保に焦点をあてて、資産担保金融が効率的に行われるための制度を構築する必要があると述べた。

スタンフォード大・マッキノン教授が特別セミナー

流動性の罠に陥っている日本

国際金融・開発金融の分野で世界的に著名な経済学者、ロナルド・I・マッキノン教授 (スタンフォード大学経済学部) を招き 3 月 24 日、「Japan's Negative Risk Premium in Interest Rates: The Liquidity Trap and Fall in Bank Lending」と題した特別セミナーが OSIPP 棟で開催された。

マッキノン教授の研究は国際金融・経済開発、「最適通貨圏」「途上国

の金融自由化」「3 極通貨体制論」「移行経済の市場自由化の順序」「途上国の最適通貨制度」と時代時代の重要な政策課題にわたり、その卓越した先見性・洞察力は定評がある。

セミナーでは低金利時代に突入した日本経済の現状を「流動性の罠」に陥っていると分析し、金利と為替レート不確実性が根本的な問題であると指摘した。

院生会総会を開催 規約の改正などを決定

OSIPP 院生の自治組織、院生会の 03 年度の総会が 4 月 17 日、OSIPP 棟で開かれ、院生会規約施行規則の改正などが決まった。従来は、院生会に対する個人の意見などは、各ゼミの幹事が取りまとめて院生会に付託されていたが、院生会規約に但し書きを付し、個人による直接の意見提示が可能になった。院生室の机の利用に関しては昨年度同様、ゼミに所属する院生の割合によって振り分けられる一部指定席制が承認された。

偶感

一介のサラリーマンであるにもかかわらず、縁あって、学習院大学経済学部で教鞭をとらせていただいている。これまでも、出向で会社を離れたり、OSIPP や社外の研究会などに参加させてもらったりして、様々な方々から教えをいただく機会に恵まれてきた。■そのような時、何よりもありがたいと感じるのは、大きな環境変化のおかげで、日々驚きが絶えないことである。例えば、現在のように教員の立場にいと、学生が若さを糧に大きく変化するように驚かされる。時には予想外のパフォーマンスを示してくれることもあれば、心の病でドロップアウトしてしまう者もいた。その一助にでもなれば、非常に充実感を得られるし、何もできなかったときには無力さを痛感する。また、複数の学部が一箇所に集まっているので、今まで学んできたこと以外の叢智に接する機会が容易に得られることも驚きにつながる。今、私は学生に混じって、社会心理学の講座を受講させてもらっている。■そのような驚きの背景にあるのは、欠如の認識であろう。今まで意識していなかった、足らざるところを自分の中に発見するからこそ驚きがある。何かを欲望する者は、自分に欠けているものを欲望するのであり、自分に欠けていないものを欲望することはない。■この言葉通り、欠如の感覚は、自分を高めようという動機づけにつながる。■特に、現在の環境が来年 3 月までというように、締切日が設定されているとなおさら、一日、一日を大切にしようという気持ちを持ち続けることができる。それは、おそらく私のような凡人には日常の業務の中ではなかなか得ることのできない、外部環境が変わるからその感覚であろう。それを許してくれている、会社や家族、大げさに言えば広く社会一般に日々感謝する毎日である。いつかお返しをしなければ罰があたりそうだという畏れの気持ちすらある。■来年 4 月には、帰阪し、社業に戻る予定である。しかしながら外部環境を意図的に変化させるといふ企ては、これからでもできる限り継続していきたいと思っている。もうそろそろいい年になってきた。足らざることに超然としていられる境地にたどり着けるのは、いつの日か。妻の「またか」という呆れ顔が目につく。(学習院大学経済学部教授・大阪ガスから出向、OSIPP 修了生) 豊田尚吾)